

之御祈禱、於何方執行候旨、年寄御老中之取次迄、爲知候並も有之、被申上給候様申遣候事、

〔寺社法則上〕寛政十一未三ノ三 秋鹿幸藏ヨリ達

大納言様家慶徳川御厄除之儀御先例御糺之事

上野執當より差出候書面如左

此度大納言様御厄除之御札被進候、此後大納言様御年齢被爲成候迄之間、御幾歳々々ニ而御厄除之御札被進候哉、御先例可有之候間、委細御承知被成度と之御事、

此後ハ、御貳十五御四十貳、兩度ニ而御座候、尤右兩度ハ、三山其外御祈願所ニ而ハ一統御厄除御祈禱修行仕事ニ御座候、此度御七歳御厄除と申は、日光山計ニ而御修行之御事と奉存候、尙彼山へ相糺、前文之趣相違之儀も御座候ハ、尙又可申上候、御尋ニ付此段申上候、

執當兩名

○按ズルニ、徳川家慶寛政五年ニ生レ、今年方ニ七歳ナリ、

〔吾妻鏡脱漏〕元仁二年元年嘉祿十月廿七日甲寅、國道朝臣參武州御亭、申云、今曉、大白入アキ御慎文分明歎、隨而日來天變連々出現訖、御所營作事可被延引歎云々仍被行御占可有何年御沙汰哉之趣也、可爲今年之由各占申、重宗、明年共不可然之由申之、晴賢申云、造内裏以下作事天變不憚之上、明年若君御年九、不可有御造作之御年也、早可被始成風之功云云、

○按ズルニ、藤原賴經、建保六年ニ生レ、明年方ニ九歳ナリ、

〔源平盛衰記十〕丹波少將上洛ノ事

治承三年二月廿二日、宗盛卿、大納言並大將ヲ上表アリ、今年卅三ニ成給ケレバ、重厄ノ慎トゾ聞エシ、

〔源氏物語薄雲〕くちおしういぶせくてすぎ侍ぬること、いとよはげに聞え給、卅七にぞおはし